

初冬の頃の三島池

— 滋賀県米原市池下地内 —

(株)三東工業社 北川 孝

1. 概要

滋賀県米原市(旧山東町)にある三島池(表紙写真)は、大池とも比夜叉池ともいわれている。周囲約780 m、面積39千 m^2 の楕円形の農業灌漑用水池で、北にある女溜おなごだめと呼ばれる小さな池とつながっている。また西には、この池との関係が深い三嶋神社が鎮座している。平常時の水深は約50 cm、増水時には80～120 cmほどになり、下流域の池下、加勢野、志賀谷の農地を潤している(図-1)。

水源は伊吹山に源を発する姉川の伏流水が主であったが、近年は上流部での地下水揚水の影響で、姉川からの流入水により大半がまかなわれている。

古くから三嶋神社の神池として殺生が禁じられていたので、鳥類、魚類をはじめとした豊かな生物相を

見ることができる。とくに水鳥の飛来地として有名で、留鳥(渡りを行わず、一年中いる鳥)のカイツブリ、カルガモをはじめ、冬には渡り鳥のマガモやオナガガモ、ハシビロガモなどが多数訪れる(写真-1)。かつてはヒシクイやオシドリ、オオハクチョウなども姿を見せていた。

また桜やモミジの名所でもあり、百名山の一つ伊吹山の姿を水面に映す鏡池としても知られる景勝地で、2010(平成22)年に農林水産省の「ため池百選」に、また「滋賀のため池50選」にも選定されている(写真-2,3)。さらに初夏には、三島池から流れる蛍池(大和川)で、ゲンジボタルの乱舞が見られる。

2. 築造の経緯

三島池の築造の経緯には2つの説がある。

まず、「近江輿地志略」によると、佐々木秀義(1112～1184年)が、干ばつに苦しむ農民を救済するため、この地に用水池を掘ったとしている。しかし水が溜まらなかったため占ったところ、女性を人柱に立て池の底に埋めれば水が満つるとのお告げがあり、秀義の乳母、比夜叉御前が自ら志願して人柱となり、その後は常に満水になったという。

また「改定近江国坂田郡志」では、先の説とともに、大原氏の始祖、大原(佐々木)重綱(1207～1267年)が伊豆の三嶋の神を勧請し神社をつくる一方、三嶋の海をかたどって三島池を築造したとする伝承も記されている。

しかし同郡志と「山東町史」は、いずれの説が真なのか不明としている。

3. 自然公園化の経緯

三島池は、これまで自然公園化に向けた取組みが行われてきた。その経緯は、次のとおりである。

高度経済成長期に入る1952(昭和27)年には、上流部の伊吹山麓にセメント工場が進出し、地下水の多量揚水がはじまったが、三島池はまだ水が澄み、池の中からは湧水がこんこんと湧き出していた。

地域の中学校の科学クラブがマガモの自然繁殖を確認したのは、1957(昭和32)年ごろのことである。



図-1 三島池受益図



写真-1 カモ群で騒めく朝の三島池



写真-2 西日を受けて紅葉が映える鏡池



写真-3 マガモが心を癒してくれる晩秋の池面

1959（昭和34）年には、「マガモ自然繁殖の南限地」として、滋賀県の天然記念物に指定された。しかし、上流部ではさらに揚水が進み、三島池の湧水が完全に止まってしまったことにより三島池に泥土が堆積し、富栄養化が進みはじめ、ヒシが池全面を厚く覆うようになった。さらにハスも徐々に水面を占有するようになり、ほかの水生植物は次第に三島池から姿を消しはじめた。

1971（昭和46）年、はじめて三島池にブルドーザ

が入り、北側の湿地を削り、池全面が水面となった。このときでた土砂を積み上げてできたのが大きな人工島である。田植え前の満水期でも水没しない島として、マガモの産卵や水鳥の休息地となっていた。

1972（昭和47）年には、滋賀県が鳥獣保護のため、三島池周辺の土地や山林、農地約7.5 haを公有化し、自然公園として整備した。

しかし富栄養化はますます進み、ハスやヒシの群落が大繁茂し魚の死体が浮上するなど、三島池の環境は悪化の一途をたどって手に負えなくなり、水鳥の着水もままならない状態だった。

そこで1980（昭和55）年、旧山東町と滋賀県が平常水深が1 mになるよう大規模な浚渫をした。その結果、鏡のような水面になり逆さ伊吹が美しく映るようになったが、池の水は透明にならず黄緑色のままで、オオヒシクイは徐々に渡来しなくなった。その代わり開水面が広がり、給餌もあって、1,000羽を超えるマガモが飛来するようになった。

1981（昭和56）年には、キャンプ場・ハイキングコースなどを備えた県下初の野外活動センターが三島池周辺に誕生し、自然と親しむエリアが広がっていった。

1989（平成元）年、旧山東町は、ふるさと創生事業の「鴨と螢の里づくり事業」として1995（平成7）年の完成をめざして、30.5 haにおよぶ「三島池自然公園事業」をスタートさせた。

ところが三島池の護岸は、石積みやコンクリートで囲まれていたことからアオコが発生するようになり、先の大浚渫で自浄作用がなくなったことで水鳥の糞による富栄養化に追い打ちをかけ、アオコの発生が徐々にひどくなり、富栄養価が極みに達した。

その後、紆余曲折を経て2003（平成15）～2005（平成17）年には、県営事業として「三島池地区地域環境整備事業」が実施され、流入水の自然浄化と排水設備が大幅に改良された。

また時を同じくして旧山東町内では下水道が整備され、また農業排水の汚濁防止の対策が功を奏し、三島池への流入水の汚濁も改善された。上流側の女溜には水生植物が繁茂し、泥土の沈殿や三島池への流入水が自然浄化に一定の役割を果たすようになり、近年では、アオコの発生を全く見なくなった。

4. 三島池の用水管理

三島池の灌漑面積は、3集落合わせて20 haで、すべては水田であり、灌漑期間は4月15日～9月15日としている。用水の管理は、池下区から選出された水利委員7人が交代で行っており、その水量調整は従来より角落し堰によっているが、近年は水利委員の高齢化により増水時の操作には安全性の確保が必要不可欠

となってきた。

5. 環境保全活動

1994（平成6）年，三島池周辺の清掃作業は，池下区と旧山東町との確認に基づき婦人会が主となり，月1回のペースでその活動が続けられてきた。しかし婦人会解散後は池下区内の各組が交代で担当することとなり，1999（平成11）年からは，毎月第1日曜日の朝，区民総出で清掃活動が実施され，現在に至っている。

その後2007（平成19）年からは，国の「農村をまると保全する共同活動事業」の採択により，「池下まると保全会」を立ち上げ，三島池の堤の点検や汚濁水の流入防止などの活動に努めている。

6. おわりに

三島池周辺は，鴨や螢の里として多くの人に愛されてやまない大切な故郷であり，これまでさまざまな伝統・文化・知恵・技術が，人から人へ，時代から時代へと受け継がれてきた。その中でも，三島池は地域の大切な農業遺産であり，地域と行政が一体となり，いつまでも大切に守り続けたいものである。

参考文献

- 1) 池下区史編纂委員会：三島池の郷 池下物語，サンライズ出版（2018）